～愛別町の地域素材～

１．愛別町の概要

《町名の由来》　アイヌ語のアイペット（「矢のような川」）から付けられた。愛別町は旭日昇天の勢いで発展するという意味を表している。

《位　　置》　愛別町は，北海道のほぼ中央に位置する上川盆地の東北端，大雪山麓にある。東は上川町，西に比布町，南は当麻町と接し，北は山脈を境にして朝日町に接している。

《地勢・気候》　東方に旭岳を中心とする大雪山連邦，東南方に東山と伊香牛山，東北方に天塩岳の山麓にあたる辺見山と丸山，そして北方には大正山，西方に班渓山と，周囲を山に囲まれている。しかし，いずれも１０００メートル以下の山が中心となっており，平地は海抜２００メートル程度。また河川については，石狩川と愛別川，その支流のパンケ川，狩布川，パンケメムナイ川など５４本の本支流が町内を流れ水田を灌漑しています。

《沿　　革》　明治２８年に和歌山・岐阜・愛知から１７９戸が入植し，厳しい自然と闘い，また，共存しながら幾多の困難を乗り越えて今日の基礎を築いた。うっそうたる原野が今では恵み豊かな大地へと生まれ変わり，きのこ・米・畜産を基幹産業とした農業の町として，また，日本で初めて自家用飛行機を持った先進的な町として躍進を続けている。

２．地域素材

《町を支える産業》

【商　業】

商工業については，マイカーの普及による消費者の町外への流出や，大型店への購買力の集中といった多くの問題を抱えているが，そんな中でも親しみやすい対面販売の魅力を打ち出したり，ふれあいのある商店街の形成をめざすなど商工会を中心に振興諸対策を進めている。

工業は，豊富な森林資源を背景にした製材・ベニヤ・集成材などの工場やコンクリート製品工場などがあり，堅実な生産を続けています。こうした既存の工場の経営安定のための施策を進める一方，恵まれた自然環境と共生していける企業の誘致にも力を入れている。

【林　業】

森林は，木材の生産のほか，ゆたかな水やきれいな空気を育む環境材としての役割も注目されている。愛別町は，総面積の８４％というゆたかな森林資源をもち，林業が産業の一つの核として発展してきた。守り，育てる林業を目標に，造林，育林にも力を入れて森林の整備を行っている。

また，花，町木の植樹をはじめ，結婚記念植樹，赤ちゃん誕生植樹も実施しており，農村公園でのふるさとの森記念植樹など，日々の生活の中で緑の優しさを感じるよう努めている。

【農　業】

移住者達の悲願だった米が始めて穫れた明治３１年以来，農業は町の基幹産業として町経済を支え，地域の発展に大きな役割を果たしてきた。しかし，他の地域同様に国内外の産地間競争の激化や畜産物価格の低迷，担い手の高齢化，後継者問題など農業を取り巻く状況は激しいものがある。水稲・きのこ・畜産を３つの柱に，将来を見据えた確かな農業の基盤を作りつつある。

〔米〕
米については，生産性の向上と生産コストの低減を図り，担い手に農地を集積し経営の体質強化を図るため，道営事業として担い手育成基盤整備事業「区画整理型」を実施している。
また，用水路の整備，土作り対策と堆肥施用によるクリーン農業にも取り組んでいる。さらに，「安全」「おいしい」「栄養価が高い」愛別米のブランドを確立し，売れる米作りを推進している。
そして，農業の果たす役割や重要性を正しく理解してもらうおうとの考えから，農作物の体験学習や体験農場を通して都市との交流を深め，参加者達からも好評を博している。新しい角度から農業をとらえ，都会でのサラリーマン生活を捨てて農業に夢を託す若い担い手も出てきている。
〔きのこ〕
昭和４７年から本格的な栽培がはじめられたきのこは，現在，エノキ・舞茸・シイタケ・ナメコ・シメジに，新たに試験的にエルムマッシュとハタケシメジが加わって７種類となった。全道のきのこ生産量の７５％を占めるまで成長し，「きのこの里・愛別町」の名は広く浸透した。共同利用による施設の合理化，効率化によるコストダウンを図るため「培養センター方式」を整備し，安定生産と販路の拡大に力を入れている。

【畜　産】
「安全」「安心」「良品質」な畜産を進め，輸入自由化という激しい状況の中で年間販売総額２０億を突破している。さらに，畜産経営の安定的な発展を図るため，よりよい畜産物の生産と低コスト生産に向けた経営体質の強化に取り組むために各種助成を進めている。
また，担い手育成と良質な粗飼料の確保のために草地の改良，家畜糞尿の有効利用に努めている。

《あいべつオートキャンプ場》

平成９年，石狩川の河畔に整備され，アウトドアの拠点として町外から多くの人が訪れている。たっぷりとした駐車スペースはもちろん，６か所のキャンピングカーサイト，２７か所のスタンダードサイト，フリーテントサイト，炊事棟，シャワー，トイレと充実した設備が整っている。すぐ目の前には，ニジマスや幻の魚イトウが棲む石狩川の清流が流れ，絶好のフィッシングポイントとなっている。また，サイト裏手の石垣山は気軽に登頂できる最高のトレッキングコースである。ちょっと足を延ばすと旭川国際カントリークラブ，親水緑地公園，釣りやカヌーを楽しめる愛別ダムなど家族そろって楽しめるスポットがある。

《愛別ダム》

釣りとカヌーなどのスポーツが楽しめるアウトドアフィールドである。平成２年９月１８日，総事業費１２０億円と８年の歳月をかけて完成した。堤高３９メートル，長３７０メートルの重力コンクリートダムで，総貯水容量９５０万立方メートルの洪水調節，河川維持用水の補給，上水道用水及び工業用水の供給を目的とした多目的ダムである。
堤体下の公園には遊歩道，水のみ場，東屋，トイレが設けられている。夏はトラウト，冬はワカサギ（１月～３月）釣りが楽しめる。

《石垣山》

中愛別駅南方約２．５ｋｍ，標高５２５ｍ，石狩川の浸蝕によって露出された柱状節理の巨岩奇石が屹立して，層雲峡の大函・小函を彷彿されるところ。付近一帯は道有林に属して針葉樹，広葉樹の巨木がうっそうと茂って，特に送電鉄塔付近の白樺林は他にはない眺め。頂上に達すると中愛別，愛山はもちろん，当麻・比布・旭川方面も眺望でき，春はコブシ・桜，夏は滴るばかりの緑に，秋の燃えるような紅葉が石狩川の清流に映えて風向明媚で登山遠足の好適地で，近年は植物採取やロッククライミングに情熱を注ぐ若い人や学生も訪れる。

麓には北海道電力株式会社愛別発電所があり，山頂付近には８８か所を祀ってある。松浦武四郎や間宮林蔵もこの石垣山に来ていると伝えられている。この岩窟は石垣山の頂上附近にあって畳三～四枚の広さの洞窟である。

《ダイコロ愛別飛行場》

愛別町は，全国の市町村で初めて自家用飛行機を持った町である。愛称を「あいべつ号」と言う白い小さなプロペラ機。形式はムーニーM20K。ふるさと創生事業のひとつとして購入したもので，平成２年６月７日，アメリカのフロリダ州レイクランドから，ハワイ，グァムを経由し，ダイコロ愛別飛行場に降り立った。町では町民対象の体験飛行などに利用している。

《協和温泉》

市街地から，道道下川愛別線を朝日町方面へ車で５分ほど進むと，なだらかな山に囲まれた「湯元協和温泉」がある。温泉の歴史は明治時代に遡り，当時，宿から約２ｋｍの山奥で自然湧出している冷泉が発見された。当時の地名から「美志内（うつくしない）の霊泉」と呼ばれ，開拓農民達は自宅に持ち帰り風呂に入れていたという。その後，昭和初期に源泉近くに宿ができたが，しばらくして廃業。地域の宝をそのままにしておくのを惜しんだ町民有志が資金を出し合い，源泉からパイプを引き，１９６９年に現在の場所に宿を建てた。正式な泉質名は，含二酸化炭素－カルシウム・マグネシウム－炭酸水素塩泉。源泉温度は９度で内風呂の端にある小さな湯船に注がれている。

《蔵KURARAら》

建物は，大正１３年に兼七（かねしち）愛別酒造合名会社（のちの大雪山酒造株式会社）が酒の貯蔵庫として建造したもので，札幌軟石を使用している。

昭和２１年に愛別村農業会（現愛別町農業協同組合）へ売却，農業倉庫（主に米の貯蔵庫）として使用されていた。

愛別町では歴史あるこの貴重な建物を「まちなか活性化構想」により商店街の核施設及び交流や情報の発信の場，気軽に憩うことのできるやすらぎの場とするために改造した。この建物を中心に賑わいのある商店街の形成を目指している。

《イベント》

四季折々のまつりやイベントには，愛別町の個性があふれる。大自然の懐に抱かれて行われるまつりやイベントには，子どもからお年寄りまで多くの人が集まり，楽しいひとときを過ごしている。

蓬莱山の千本桜が待ちわびた春の訪れを告げ，真夏の太陽の下，あいべつ夏まつりやよさこいチームが舞い乱れる愛嵐土フェスティバルが，また風そよぐ愛別ダムの湖畔では水と緑の祭りが開催されている。収穫の秋には，特産品のきのこと牛肉が大人気の，きのこの里フェスティバルがダイナミックに繰り広げられている。真っ白い雪の中を，赤い球を追って駆け回る雪中ソフトボール。ふる里のまつりは，いつも自然とともにある。